

潜在的な自己制御システムを測定する Go/No-go Association Task の作成

坂井 亮 紀^{*1}・上 淵 寿^{*2}

学校心理学分野

(2016年9月12日受理)

制御焦点理論 (regulatory focus theory) とは, “快に接近し不快を回避する” という快樂原則 (pleasure principle) に基づいた, 自己制御研究から生まれた理論であり, 快と不快を独立した制御システムとして扱うことに併せて, 快・不快状態の各々の質的差異を区別した (Higgins, 1997)。利得の存在に接近し, 利得の不在を回避しようとする自己制御システムは「促進焦点 (promotion focus)」, 損失の不在に接近し, 損失の存在を回避しようとする自己制御システムは「予防焦点 (prevention focus)」と名付けられている。制御焦点は, 人の感情・思考・行動に影響をあたえることが明らかになっている (Higgins, 1998) もの, 制御焦点を特性的に捉えた指標, 特に潜在的な指標からの影響は, 十分検証されていなかった。さらに, 社会的望ましきバイアスの影響を受けず, 従来では予測することの出来なかった統制困難な行動指標を予測することのできる潜在的な指標の作成の例はみられない。ゆえに, 潜在的指標の作成と, その指標からの行動への影響の検討は, 極めて重要だと考えられる。

1. 問題

制御焦点理論を扱う研究は多く, 様々な知見が蓄積されてはいるが, その大半が顕在的な指標を用いて制御焦点理論の促進焦点・予防焦点を測定している。顕在的な自己概念から予測することのできる認知・行動変数がある一方で, 潜在的な自己概念からのみ予測可能な変数が存在することは Posner and Snyder (1975) の二過程モデルからも明らかにされていることではあ

るが, 制御焦点理論の研究分野において, 未だ相応な潜在的な指標の開発には至っていない。

本節では, まず第1項で制御焦点理論に関する基本的概念について触れ, 第2項で制御焦点が影響を及ぼしうる行動変数について触れる。そして, 第3項で制御焦点理論を測定する指標について概説し, 第4項で現在の制御焦点理論研究の問題点について触れる。次に, 第5項で制御焦点の測定に潜在指標を用いることの意義を説明し, 最後に, 第6項で潜在的な制御焦点理論を測定するための Go / No-go Association Task という潜在指標を紹介する。

1. 1 制御焦点理論 (regulatory focus theory) とは

“快に接近し不快を回避する” という快樂原則 (pleasure principle) は, 人間のみならず, すべての動物に共通する行動原理である。自己制御研究の多くがこの快樂原則の枠組みを用いており, 快に接近するシステムと不快を回避するシステムを区別した理論を考案してきた。たとえばコントロール理論 (control theory; Carver & Scheier, 1982) では, 望ましくない基準に対するズレ低減システムと, 望ましくない基準に対するズレ増大システムを分けている。同様に, BIS/BAS理論 (Gray, 1981, 1990) も, 賞の獲得に動機づけられた行動活性化システム (Behavioral Activation System; BAS) と, 罰の回避に動機づけられた行動抑制システム (Behavioral Inhibition System; BIS) を区別している。いずれの理論も, 快に対するシステムと不快に対するシステムが, それぞれ独立して存在することを想定しているところが共通点である。

*1 東京学芸大学教育学研究科

*2 東京学芸大学 教育心理学講座 学校心理学分野 (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

Higgins (1997, 1998) は、自身が提唱した制御焦点理論 (regulatory focus theory) において、快と不快を独立した制御システムとして扱うことに併せて、快・不快状態の各々の質的内容についても考慮するべきであると主張している。つまりどのような快状態に対して接近し、どのような不快状態に対して回避するのかという質的差異を区別する必要があるという。制御焦点理論において、快状態は利得の存在と損失の不在に分類され、不快状態は利得の不在と損失の存在に区別される。利得の存在に接近し、利得の不在を回避しようとする自己制御システムは「促進焦点 (promotion focus)」, 損失の不在に接近し、損失の存在を回避しようとする自己制御システムは「予防焦点 (prevention focus)」と名付けられている。ひとりの人間は促進焦点と予防焦点の両方をあわせてもっており、状況に応じていずれかを活性化させて使い分けている。Higgins (1997, 1998) では、制御焦点の上位概念であるセルフディスクレパンシーを独立変数として設定している。セルフディスクレパンシー理論は理想自己・義務自己と現実自己のズレを、それぞれ促進焦点・予防焦点の程度として捉えている (Higgins, 1987)。Higgins and Tykocinski (1992) では、促進焦点が高い人は、肯定的結果の存在・不在の文章記銘に優れており、予防焦点の程度が高い人は、否定的結果の存在・不在の文章記銘に優れていることが明らかになっている。また、Higgins, Shah, and Friedman (1997) では、促進焦点が強いほど、成功体験は喜び関連情動、失敗体験は落胆関連情動を喚起し、予防焦点が強いほど、成功体験は安心関連情動、失敗体験は不安関連情動を喚起した。以上のように、制御焦点は、人の感情・思考・行動に影響を与えることが明らかになっている (Higgins, 1998)。

1. 2 制御焦点理論と Speed/accuracy の関連

促進焦点と予防焦点は、どちらも快に接近し不快を回避するという快樂原則に従うという点で共通している。しかし、どのような基準を設定し、その基準にたいしてどのような方略を用いているかという点で、両者は異なった傾向を示す。促進焦点は、目標達成の手段として、肯定的結果をもたらしてくれる行為をできるかぎり実行に移そうとする。このような接近的な達成手段のことを熱望方略 (eager strategy) と呼ぶ。熱望方略は、肯定的結果をもたらしてくれる可能性があるかぎり、多少のコストやリスクの可能性は気にかけずに、迅速に目標追求行動を実行しようとする。つまりすばやく判断を下して大胆に行動する傾向を示す。

一方、予防焦点は、目標達成の手段として、否定的結果をもたらすかもしれない危険性に十分に注意をはらい、できるかぎりリスクを排除しようとする。このような回避的手段のことを警戒方略 (vigilant strategy) と呼ぶ。仮に肯定的結果が得られる可能性があったとしても、損失の危険性のある行動は取りたがらない。つまりじっくりと状況を見極めて慎重な行動を取ろうとする。

促進焦点がつかさどる熱望方略と予防焦点がつかさどる警戒方略は、一方が他方よりも常に優れた成果を出すというわけではなく、課題の性質に応じて優劣が異なる。創造性や発想力が求められるような課題では、促進焦点が強いほどリスクを恐れずに幅広い探索と自由奔放な試行錯誤を実行できるため、予防焦点よりも優れたパフォーマンスを発揮する (Friedman & Foster, 2001)。一方、ミスなく正確に実行すると言う点においては、予防焦点が強いほど慎重に作業を進めるため、促進焦点よりも優れたパフォーマンスを示す (Foster, Higgins, & Bianco, 2003)。

Foster et al. (2003, Study4) では、制御焦点理論の促進焦点・予防焦点のいずれかを参加者間で活性化させ、文章校正課題における迅速さ (speed) と正確性 (accuracy) に及ぼす影響を検証した。その結果、促進焦点を活性化させた群は、予防焦点を活性化させた群よりも迅速さ (speed) の得点が有意に高く、予防焦点を活性化させた群は、促進焦点を活性化させた群に比べ、難易度の高い課題においてのみ正確性 (accuracy) の得点が有意に高かった。この結果から促進焦点は迅速さ (speed) に、予防焦点は正確性 (accuracy) に影響を及ぼすことが実証されている。しかし、Foster et al. (2003, Study4) では制御焦点を参加者間で状況的に活性化させており、質問紙などで測定される顕在的な特性的制御焦点からの予測は検証されていない。

1. 3 制御焦点を測定する指標について

Higgins (1997, 1998) が制御焦点理論を詳細に提唱して以降、個人差を測定する顕在的な指標の作成・開発は進められてきた。代表的なものとして Higgins, Friedman, Harlow, Idson, Ayduk, and Taylor (2001) が作成した RFQ (Regulatory Focus Questionnaire) がある。全11項目で構成され、促進焦点 (6項目) と予防焦点 (5項目) の二つの下位尺度から構成されている。RFQは日本語版が遠藤 (2011) によって作成されており、どちらも信頼性・妥当性が確認されている。Lockwood, Jordan, and Kunda (2002) は促進焦点を利

得接近志向, 予防焦点を損失回避傾向として捉え, その目標志向性の強さを測定するPPFS (Promotion/prevention focus scale) を開発した。PPFSも尾崎(2011)によって邦訳版が作成されており, 信頼性・妥当性が確認されている。制御焦点理論研究において, 個人差測定研究は進んでいるが, 個人差が認知・行動変数に影響することを調べた研究は少ない。

制御焦点を独立変数として設定する際には, 制御焦点を特性的 (characteristic) に捉える立場と, 状況的 (situational) に捉える立場の二つが存在する。しかし, 制御焦点が認知・行動変数に与える影響を検証した研究で, 制御焦点を状況的に捉える立場のものが圧倒的に多い (e.g., Roney, Higgins, & Shah, 1995; Stepper, Strack, & Higgins, 1997; Higgins et al., 1997; Friedman & Foster, 2001)。

状況的に制御焦点を捉える際には, 上述のような制御焦点理論の個人差の指標は使用されておらず, フレーミング技法などを使用し, 状況的に制御焦点を活性化させている。Roney et al. (1995) では, 初めの課題の成績によって, 次に行く課題が面白い課題か, つまらない課題かが決定されると教示を行った。促進焦点条件の教示は, 「25問中22問以上とければ面白い課題, それ以下ならつまらない課題」というものであり, 予防焦点条件の教示は, 「25問中4以上間違えればつまらない課題, それ以下なら面白い課題」というものであった。参加者はいずれかの教示を受けることによって, 利得もしくは損失を状況的に活性化されている。

繰り返すが, 制御焦点を特性的に測定する質問紙などの指標は開発・作成されているものの, 認知・行動変数への影響を検証する上で, 制御焦点の特性的な個人差を独立変数として使用している研究が少ないのが現状である。

1. 4 制御焦点理論研究の問題点 —社会的望ましきバイアス—

制御焦点理論研究において, その個人差を測定する顕在的な指標の作成・開発は進められてきた。しかし, 顕在的な指標は社会的望ましきの影響をうけるといふ問題が存在する。社会的望ましきの影響とは, 質問紙などの顕在的な指標に測定する際に, 社会的望ましきが回答に影響することで, 回答が歪められ適切に査定することが困難であることを指している。Paulhus (1984) は社会的望ましきの下位因子として自己欺瞞と印象操作を検出している。自己欺瞞は, 回答者が本当に自分の自己像と思ひ込み, 潜在的に社会的

に望ましく回答する反応を指している。印象操作は故意に回答をいい方向に歪めて自己像を偽る反応を指している。質問紙などの顕在的な尺度が社会的望ましきの影響を受けていることを確認している研究は数多く存在する (e.g., 藤井・上淵, 2010; 藤井, 2010)。しかし, 自己欺瞞と印象操作が顕在的な指標に別個に影響を与えていることを詳細に考察した研究はみられない。もし, 質問紙などの顕在的な指標に影響を及ぼしているのが意識的な反応である印象操作であるならば質問紙の教示などで統制することは可能であるかもしれないが, 潜在的な反応である自己欺瞞であるならばその統制は難しく, 回答の歪みを統制することは困難であると考えられる。本稿では, 社会的望ましきの各下位因子が顕在的な制御焦点に与える影響を詳細に考察することとする。

Tan and Hall (2005) は制御焦点の類似概念として取り上げられている達成目標理論の質問紙 (Midgley, Kaplan, Middleton, Maehr, Urdan, Anderman, Anderman, & Roeser, 1998; VandeWalle, 1997) への回答が社会的望ましきの影響をうけていることを確認した。ゆえに, 質問紙などで測定される顕在的な制御焦点が社会的望ましきの影響をうけることにより, 回答が歪められ適切に測定できていない可能性が指摘される。本研究では, 以上の点を考慮し, 潜在的測定法によるアプローチを試みる。潜在的測定法の長所として, 参加者が測定対象に気づくことが少なく, 回答を意図的に操作しにくいことが挙げられる。ゆえに, 社会的望ましきによるバイアスの問題も解決可能であると考えられる。

1. 5 制御焦点理論の測定に潜在指標を用いることの意義

制御焦点の測定に潜在的指標を用いることの意義として, Posner and Snyder (1975) の二過程モデルが挙げられる。二過程モデルとは意識的な自己概念が統制可能な行動指標を予測し, 潜在的な自己概念が統制困難な行動指標を予測するとするモデルである。Asendorpf et al. (2002) は潜在的測度で査定された指標が, 同じく潜在的な測度で査定された指標のみを予測し, 顕在的な測度で査定された指標は, 同様に顕在的な測度でされた指標のみを予測するという二重分離モデルを主張している。現存の質問紙などの顕在的な測度が意識的な自己概念を測定していると考えられるならば, それらの顕在的な指標からは個人に統制可能な顕在的な認知・行動変数を予測することができる。しかし, 個人に統制困難な変数を予測するためには, 本研究で作成するような潜在的な測度が必要であると考え

られる。

潜在的な制御焦点理論を測定する指標を作成することで、従来では予測することのできなかつた統制困難な行動指標を予測することが可能になり、制御焦点理論研究の知見の幅が広がると考える。

1. 6 Go / No-go Association Task (GNAT) を用いた測定

社会的望ましきバイアスに左右されず、内在化された傾向が測定できる潜在的測定法は、自動的制御研究の発展とともに様々なものが開発されつつある (Fazio & Olson, 2003)。本研究では、単一概念の潜在的態度を測定するツールとして開発された Go/No-go Association Task (Nosek & Banaji, 2001; 以降, GNATと略記) を使用する。GNATは、潜在的測定法の中で多くの研究に用いられている潜在連合テスト (Implicit Association Test; 以降, IATと略記) から派生した潜在的指標であり、IATの方法論上の制約を取り払い、より柔軟な運用を行うことが可能になっている。

GNATはIATと似た実施方法・構造を持つが、刺激を2種類に分類するのではなく、指定されたカテゴリーに当てはまるか、当てはまらないかを、キーを押すか、押さないかの判断によって分類する。手続きは、Figure 1のように進行する。判断対象となる刺激には、評価対象となるカテゴリーに属する単語や写真に加え、デストラクターと呼ばれる、それ以外の単語・写真がランダムに混ぜてある。GNATもIATと同

様に、単独の判断課題を行う練習を目的としたブロック (単弁別課題) と、2つの判断課題を同時に行う連合の強度を測定するブロック (連合弁別課題) から構成されている。

例として、対象刺激を“虫”とし、「“虫” — “不快”」の連合を測るためのテストの場合を説明する。まず練習として、単弁別課題において、次々と画面に現れる刺激 (e.g., カブト, スミレ, 喜び, 悪) が“虫 (対象刺激)”, “花 (妨害刺激)”, “快 (正の評価刺激)”, “不快 (負の評価刺激)” に当てはまるか当てはまらないかを、スペースキーの押下の有無によって、ブロックごとに判断する。一定時間スペースキーを押すことがなければ、次の刺激が画面に提示される。次に、連合弁別課題では、一つの条件において、画面に現れる刺激が“虫”もしくは“快”に当てはまるのかを同時に判断し、どちらかに当てはまるのであればスペースキーを押すことによって反応する。また、別の条件として、“虫”と“不快”の両方のカテゴリーに対する反応も行う。そして、連合弁別課題の2つの条件間の反応時間の差を算出し、その差の大小から「“虫” — “不快”」の連合の強さを調べる (Figure 2)。

制御焦点理論において、IATではなくGNATを使用する理由として、促進焦点と予防焦点がひとりの人間の中に、独立して存在していることが挙げられる。IATでは、個人のなかで優勢な制御焦点を測定することしか出来ず、2つの制御焦点各々を独立に測定することが不可能である。GNATを使用することで、促進

ブロック	1～4ブロック				5, 6ブロック	7, 8ブロック	9ブロック	10ブロック
課題	対象刺激の単弁別課題		評価刺激の単弁別課題		正の評価の連合弁別課題	負の評価の連合弁別課題	速度を上げた正の評価の連合弁別課題	速度を上げた負の評価の連合弁別課題
課題の教示	虫	花	快	不快	虫 or 快	虫 or 不快	虫 or 快	虫 or 不快
刺激語	サクラ カブト セミ トンボ ユリ ホタル バッタ バラ	スミレ バッタ サクラ ガ ウメ ホタル チョウ ムカデ	幸運な 栄光 毒 悲しみ 贈り物 災害 幸福な 憎しみ	毒 贈り物 奇跡 不潔 事故 悪 栄光 平和	タガメ 喜び ボタン 悪 ユリ 奇跡 チョウ 爆弾	サクラ 事故 バッタ ムカデ 虹 災害 バラ 幸運な	平和 ホタル 不潔 ボタン 虹 事故 ガ ウメ	チョウ 贈り物 悪 ウメ 栄光 ボタン カブト 悲しみ

Figure 1 GNATの手続きの概要 (「“虫” — “不快”」の連合を測る場合) (Nosek & Banaji, 2001をもとに作成)

注: GNATは5種類の弁別課題からなり、10個のブロックから構成される。1～4ブロックは単弁別課題であり、対象刺激と評価刺激の弁別課題である。5, 6ブロックで対象刺激と正の評価刺激を組み合わせた連合弁別課題を行った後、7, 8ブロックで対象刺激と負の評価刺激を組み合わせた連合弁別課題を行う。9, 10ブロックは速度を上げた連合弁別課題であり、対象刺激と正・負の評価刺激をそれぞれ組み合わせた連合弁別課題を刺激語の提示速度を上げて行う。四角で囲まれた刺激語は正解の反応であり、提示された際にスペースキーを押すことによって弁別を行うことができる。なお、1～4ブロックの順序、5, 6ブロックと7, 8ブロックの順序、9, 10ブロックの順序は参加者ごとにランダム化している。

a 連合弁別課題 (対象刺激, 正の評価刺激)



b 連合弁別課題 (対象刺激, 負の評価刺激)

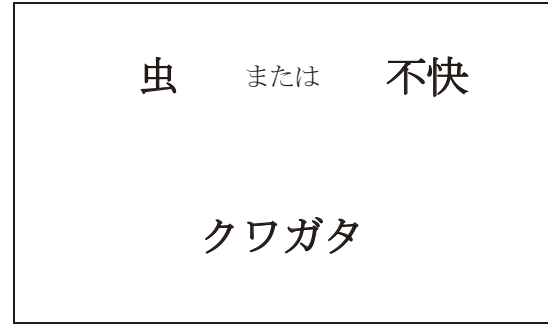


Figure 2 GNATの画面 (「虫」 — 「不快」) の連合を測る場合)

注: 画面中央に現れる刺激語をキーボードのスペースキーの押下の有無でカテゴリーに当てはまるかどうか弁別する。a, bの課題を行って、相対的にbの課題における反応時間が速いほど、「虫」は「快」よりも「不快」との連合が強いと判断される。

焦点と予防焦点を単独に測定することが出来る。以上のことから、制御焦点理論を潜在的に測定する際には、GNATを使用することが望ましいと考えられる。

2. 目的

2. 1 本研究の目的

以上のように、制御焦点理論の測定や認知・行動変数への影響を扱う研究は多く、様々な知見が蓄積されてはいる。しかし、従来の制御焦点理論研究では、セルフディスクレパンシーを特性的制御焦点として扱う (e.g., Higgins, Shah & Friedman, 1997; Shah, Higgins, & Friedman 1998) か、促進焦点・予防焦点を状況的に活性化させ (e.g., Stepper, Strack, & Higgins, 1997; Higgins et al., 1997; Friedman & Foster, 2001)、認知・行動変数への影響を検証してきた。しかし、本来定義される制御焦点を特性的に捉えた指標からの影響は十分検証されていなかった。また、社会的望ましきバイアスの影響を受けず、従来では予測することの出来なかった統制困難な行動指標の作成例はほとんどない。

近年、潜在的な自己概念を測定する指標として、IATが多く取り上げられているが、IATでは、制御焦点理論の利得に関する制御システムである“促進焦点”と損失に関する制御システムである“予防焦点”を、独立した個別の潜在的概念として測定できない測定上の限界がある。

そこで本研究では、以下の2点を目的として研究を進める。

1点目は、制御焦点理論における促進焦点、予防焦点を測定するGNAT (以下、促進焦点GNAT、予防焦点GNATと記述) を作成することである。

2点目は、作成したGNATを用いて潜在的な制御焦点理論 (潜在的促進焦点、潜在的予防焦点) を測定

し、その潜在的促進焦点、潜在的予防焦点の基準関連妥当性を検証する。すなわち、Foster et al. (2003) に倣って文章校正課題における迅速さ (speed) と正確性 (accuracy) を測定し、その得点を促進焦点GNAT及び予防焦点GNATから予測可能か検証する。

加えて、予備的研究として、顕在的な制御焦点の指標や測度が社会的望ましきの下位尺度である自己欺瞞と印象操作の影響を受けているのかも確認する。また、顕在的な制御焦点と潜在的な制御焦点・文章校正課題における迅速さ (speed) と正確性 (accuracy) の関連も検証し、顕在的な指標や測度等と潜在的な指標や測度等が独立した構成概念を測定しているかについても明らかにする。

2. 2 仮説

本研究では、先行研究の知見をもとに2つの主仮説を設定し、その検討を行う。なお、仮説の検討は研究IIで行うものとする。

仮説1: 潜在的促進焦点が高いと、熟望方略を用いる程度が高くなり、素早く判断をくだして行動する傾向を示しやすくなることから、文章校正課題における迅速さ (speed) の得点が高くなるだろう。

仮説2: 潜在的予防焦点が高いと、警戒方略を用いる程度が高くなり、じっくりと状況を見極めて行動する傾向を示しやすくなることから、文章校正課題における正確性 (accuracy) の得点が高くなるだろう。

また、予備的な仮説として、以下の仮説を設定する。

仮説3: 顕在的な制御焦点理論は、社会的望ましきの下位因子である自己欺瞞と印象操作の影響をうけるだろう。

仮説4: 顕在的な特性制御焦点と潜在的な制御焦点の得点は、Posner and Snyder (1975) の二過程モデル及

びAsendorpf et al. (2002) の二重分離モデルより、関連を示さない、つまり無相関になるだろう。

仮説5：顕在的な特性制御焦点と文章校正課題における迅速さ (speed) と正確性 (accuracy) の得点は、Posner and Snyder (1975) の二過程モデル及びAsendorpf et al. (2002) の二重分離モデルより、関連を示さない、つまり無相関になるだろう。

以下、本研究では、制御焦点理論に関するGNATの作成を目的とした質問紙調査を行い (研究I)、文章校正課題における迅速さ (speed) と正確性 (accuracy) を測定し、その得点を促進焦点GNAT及び予防焦点GNATから予測可能かを検証する実験を行う (研究II)。

3. 研究 I

3. 1 目的

潜在的な自己制御システムを測定するための、促進焦点GNATおよび予防焦点GNATを作成する。

3. 2 方法

3. 2. 1 参加者

東京都内の大学に通う大学生および大学院生20名。

3. 2. 2 調査時期

2013年10月下旬～11月上旬。

3. 2. 3 カテゴリー語および刺激語の選定

制御焦点理論と感情機能の関連を検証した研究結果に基づき (Brendl, Higgins, & Lemm, 1995; Higgins et al., 1997; Roney, Higgins, & Shah, 1995)¹, 促進焦点GNATのカテゴリー語は「得る」「喜び」「落胆」とした。同様に、予防焦点GNATのカテゴリー語は「失う」「安心」「不安」とした。いずれのGNATでも、「文房具」を妨害カテゴリーとした。(Table 1)。

3. 2. 4 質問紙

促進焦点GNATの「得る」, 「喜び」, 「落胆」カテゴリーの刺激語および、予防焦点GNATの「失う」, 「安心」, 「不安」カテゴリーの刺激語を選定するために、

類語辞典等を参考にし、それぞれのカテゴリーに属すると予想される語を各10語、合計60語を選定した。これらの語について、7件法で“得る” - “得られない”, または“失う” - “失わない”のどちらに近いと感じるかを回答するよう参加者に求めた。

3. 2. 5 調査手続き

東京都内の大学で質問紙を配布し、調査への協力を依頼した。事前説明として、“データは参加者番号をつけて扱い、個人が特定されないようにした上で統計的に処理すること”, “回答中に気分が悪くなった場合には回答を中断しても構わないこと”を説明し、承諾を得られた人に質問紙調査を実施した。質問紙への回答は個別に参加者のペースで行ってもらい、回答時間に制限は設けなかった。回答はいずれも無記名で行われた。参加者が回答を終了した後、調査者が質問紙を回収し、調査を終了した。平均回答時間は5分であった。

3. 3 結果と考察

3. 3. 1 データの処理

回答に不備があった質問紙は見受けられなかったため、20名すべてのデータを分析対象として使用した。

3. 3. 2 t検定の結果

本調査で得られたデータを用いて、7件法の理論的中央値である(4)からの差について項目ごとにt検定を行った。その結果、促進焦点、予防焦点ともに、全ての項目において1%水準で有意な差が見られた。そこで、“得る” - “得られない”および“失う” - “失わない”のそれぞれのカテゴリーについて、理論的中央値である(4)からの差が大きかった5語ずつを選定し、促進焦点GNATの「得る」, 「喜び」, 「落胆」カテゴリー、予防焦点GNATの「失う」, 「安心」, 「不安」カテゴリーに属する刺激語としたt検定の結果および選定した刺激語は、Table 2, Table 3に示す。

3. 3. 3 考察

本調査の結果から、促進焦点GNATの「得る」, 「喜

Table 1 GNATの各カテゴリーにおけるカテゴリー名

	対象刺激	正の評価刺激	負の評価刺激	妨害刺激
促進焦点GNAT	得る	喜び	落胆	文房具
予防焦点GNAT	失う	安心	不安	

Table 2 促進焦点GNATにおける各項目の t 値と理論的中央値からの差 ($N = 20$)

得る	t 値	中央値からの差	喜び	t 値	中央値からの差
○勝ちとる	-22.36	-2.750	○歓喜	-14.58	-2.650
取る	-10.42	-2.000	○満悦	-12.01	-2.350
○獲得	-22.36	-2.750	ご機嫌	-8.37	-1.850
○習得	-17.09	-2.600	○幸せ	-14.24	-2.400
もうける	-16.38	-2.150	ワクワク	-7.00	-1.850
○入手	-18.42	-2.500	楽しい	-8.87	-1.850
会得	-15.77	-2.400	○嬉しい	-9.31	-2.200
加える	-5.29	-1.050	愉快	-12.71	-1.950
手にする	-10.56	-1.950	○満足	-11.05	-2.250
○取得	-14.43	-2.450	好い	-6.57	-1.250
落胆	t 値	中央値からの差	注) すべての t 値は 1%水準で有意であった。促進焦点GNATで使用する刺激語には○印を付している。		
○失望	34.79	2.850			
○落ちこむ	19.44	2.600			
ショック	7.00	1.850			
ぼうぜん	5.38	1.300			
悲哀	6.24	1.650			
気落ち	10.30	2.100			
○挫折	10.26	2.400			
○失意	10.64	2.350			
○消沈	18.86	2.550			
がっかり	12.82	2.200			

Table 3 予防焦点GNATにおける各項目の t 値と理論的中央値からの差 ($N = 20$)

失う	t 値	中央値からの差	安心	t 値	中央値からの差
○なくす	23.94	2.800	○落ちつく	-15.96	-2.450
○遺失	19.44	2.600	○安らか	-18.38	-2.700
○ロス	9.00	1.800	○安泰	-18.86	-2.550
損する	9.49	1.700	のどか	-9.32	-1.900
逃す	8.11	1.600	なごむ	-9.08	-1.650
○損失	15.77	2.400	平静	-4.87	-1.000
欠如	6.29	1.400	おだやか	-8.43	-1.650
欠落	7.19	1.600	しずまる	-1.63	-0.400
○紛失	14.43	2.450	○安らぎ	-14.43	-2.450
不足	4.50	.950	○安堵	-16.62	-2.550
不安	t 値	中央値からの差	注) すべての t 値は 1%水準で有意であった。促進焦点GNATで使用する刺激語には○印を付している。		
○苦悶	8.37	1.850			
○心配	20.18	2.650			
ひやひや	9.08	1.650			
○恐れ	12.80	2.250			
○悩み	13.36	2.050			
○気がかり	10.78	1.900			
動揺	10.93	1.750			
おどおど	11.00	1.650			
びくびく	10.10	1.550			
憂い	4.97	1.050			

び」, 「落胆」カテゴリー, また, 予防焦点GNATの「失う」, 「安心」, 「不安」カテゴリーに属する刺激語が決定された。この刺激語を使用し, Nosek and Banaji (2001) のGNATのスク립トをもとにプログ

ラミングを行い, 潜在的な自己制御システムを測定するための促進焦点GNATと予防焦点GNATを作成した。

4. 研究 II

4. 1 目的

GNATを用いて潜在的な制御焦点(潜在的促進焦点, 潜在的予防焦点)を測定し, その潜在的促進焦点, 潜在的予防焦点の基準関連妥当性を検証する。すなわち, 文章校正課題における迅速さ(speed)と正確性(accuracy)を測定し, その得点を促進焦点GNAT及び予防焦点GNATから予測可能かを検証する。

加えて, 予備的研究として, 顕在的な制御焦点の指標が社会的望ましさの下位尺度である自己欺瞞と印象操作の影響を受けているかも確認する。また, 顕在的な制御焦点と潜在的な制御焦点の関連も検証し, 顕在的な測度と潜在的な測度が独立した構成概念を測定しているかについても明らかにする。

4. 2 方法

4. 2. 1 参加者

東京都内の大学に通う大学生および大学院生92名(男性44名, 女性48名:平均年齢20.46歳)

4. 2. 2 実施時期

2013年11月11日~11月29日

4. 2. 3 実施場所

大学内の実験室

4. 2. 4 材料

(1) 制御焦点質問紙

顕在的な自己制御システム(制御焦点)を測定するため, 遠藤(2011)が作成した制御焦点尺度日本語版

11項目を使用した。促進焦点と予防焦点を下位尺度に持つ。それぞれの項目について, 「まったくない」「あまりない」「たまにある」「時々ある」「よくある」の5件法で回答を求めた。

項目内容は, Table 4に示す。

(2) 社会的望ましさ質問紙

社会的望ましさ反応を測定するため, 谷(2008)が作成したバランス型社会的反応尺度日本語版(BIDR-J)24項目を使用した。自己欺瞞と印象操作を下位尺度に持つ。それぞれの項目について, 「全くあてはまらない」「あてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」「非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。

項目内容は, Table 5に示す。

(3) 装置

GNATの刺激の提示には, SONY製のノートパソコンTGV-TZ72Bを使用した。刺激語の提示時間の制御および参加者の反応時間の測定は, Inquisit Ver. 4(Millisecond Software社製)により行った。

(4) 促進焦点GNATおよび予防焦点GNAT

研究Iで選定した刺激語を用いてプログラミングをした促進焦点GNATおよび予防焦点GNATを使用した。潜在的な自己制御システム(制御焦点)を測定することを目的とした。

i 刺激

刺激語は, 対象刺激, 妨害刺激, 正の評価刺激, 負

Table 4 制御焦点質問紙(促進焦点・予防焦点)の項目内容

促進焦点	
No.	項目内容
1.	たいていの人と比較して, あなたは人生において欲しいものが手に入らないことがよくある。
3.	もっとがんばろうと「やる気満々」になるような事を成しとげてきたことが, どの程度頻繁にあるか。
7.	あなたがいろいろやってみる事の中で, それがうまく行くことはよくあるか。
9.	自分にとって大切な事をやることに関して, 自分の理想のようにはできていないと感じる。
10.	人生において, 私は成功に向かって前進してきたような気がする。
11.	人生において, 私の興味を引いたり努力しようとする気にさせるような趣味や活動をみつけたことがほとんどない。
予防焦点	
2.	子どもの頃, 親が決して許さないような「してはいけないこと」をすることはあったか。
4.	子どもの頃, 親の感情を逆なですることはよくあったか。
5.	親が決めたきまりや親の言うことにはいつも従ってきたか。
6.	子どもの頃, 親が好ましくないと思うような振る舞いをしたことがあるか。
8.	用心たりずに面倒なことに巻き込まれたことが時々ある。

Table 5 社会的望ましき反応尺度日本語版 (BIDR-J) の項目内容

自己欺瞞	
No.	項目内容
1	私を感じた他人の第一印象はよく当たっている。
2	私の事を他人が本当にどう思っているのか気にならない。
3	「なぜそれが好きなのですか?」と聞かれた時、何についても説明できる。
4	自分で決心したことが他人の意見で変わることはめったにない。
5	私は自分の人生を完全に思い通りに進めている。
6	いろいろなことについて、つい余計なことを考える。
7	私は自分で決めたことを後悔しない。
8	時々、すぐに決心できなくて失敗することがある。
9	私はきわめて理性的な人間である。
10	私は自分の判断をいつも信じている。
11	たとえ何人かの人に嫌われても、私にとっては問題ない。
12	なぜ自分がそうしたのか、自分でも分からないときがある。
印象操作	
13	必要であれば、時々嘘をつく。
14	人をうまく利用したことがある。
15	人をののしったことがない。
16	人と争ったとき、水に流すよりもむしろ復しゅうする。
17	私は恐らく捕まらないような時でも、いつも法律に従っている。
18	友達の陰口を言ったことがある。
19	お釣りを多くもらったとき、気づいてもそのまま受け取ってしまう。
20	道路や公共の場所で、ごみを落としたことはない。
21	他人には言えないようなことをしたことがある。
22	仮病で仕事や学校を休んだことがある。
23	図書館の本や店の商品を破損した時は、必ずそれを報告する。
24	かなりよくない習慣をいくつか持っている。

の評価刺激の4種類のカテゴリーに属する各5語、合計20語からなる。促進焦点GNATおよび予防焦点GNATで使用したカテゴリー語および刺激語はTable 6に示す。

ii 手続き

GNATを全部で10個のブロックから構成した。いずれのブロックにおいても画面中央に刺激語を連続して提示し、それらの中から、画面上部に表示するカテゴリー語のいずれかに当てはまるターゲット刺激を、ディストラクター刺激から弁別する課題を実施した。

Table 6 GNATで使用したカテゴリー語および刺激語

促進焦点 GNAT	対象刺激—“得る” 勝ちとる 獲得 習得 入手 取得 正の評価刺激—“喜び” 歓喜 満悦 幸せ 嬉しい 満足 負の評価刺激—“落胆” 失望 落ちこむ 挫折 失意 消沈
予防焦点 GNAT	対象刺激—“失う” なくす 遺失 ロス 損失 紛失 正の評価刺激—“安心” 落ちつく 安らか 安泰 安らぎ 安堵 負の評価刺激—“不安” 苦悶 心配 恐れ 悩み 気がかり
	妨害刺激—“文房具” 定規 鉛筆 消しゴム 分度器 消しゴム

ターゲット刺激が出てきた場合のみ、利き手の人差し指でスペースキーをできるだけ素早く押すように求めた。

1ブロック目から4ブロック目は、「対象刺激」、「正の評価刺激」、「負の評価刺激」、「妨害刺激」をそれぞれ弁別する単弁別課題であった。各ブロック16試行からなり、ブロックの順番は参加者ごとにランダム化した²。6ブロック目と8ブロック目は、「対象刺激」と「正の評価刺激」、または、「対象刺激」と「負の評価刺激」を組み合わせた連合弁別課題であった。各ブロック40試行からなり、ブロックの順番は参加者ごとにランダム化した。また、9ブロック目と10ブロック目は、Nosek and Banaji (2001) にならい、刺激語の提示速度を速めた連合弁別課題を行った³。各ブロック40試行からなり、ブロックの順番は参加者ごとにランダム化した。なお、5ブロック目、7ブロック目、9ブロック目、11ブロック目では、直後の連合弁別課題の練習課題を各16試行で実施し、分析からは除外した。

(5) 文章校正課題

山田 (1999) を参考に作成したものを使用した。

i 文章

中学校「国語」教科書で使用されている説明文を使用した。例文には「月の起源を探る」(小久保, 2012), 練習課題には「顔の見える国際協力」(内橋, 2012), 本課題には「テクノロジーとの付き合い方」(池内, 2006) を使用した。見本の文章の文字数は「月の起源を探る」が1248文字, 「顔の見える国際協力」が1223文字, 「テクノロジーとの付き合い方」が1243文字であった。

ii 文章の変形

変形の種類は活字の種類, 脱字, 文字順序の入れ替え, 形が似た文字, 同音で異なる漢字, 句読点の省略や入れ替えの6種類であった。各文章中にそれぞれ59箇所の変形箇所を作成した。各文章における種類別の変形箇所の個数を Table 7 に記す。なお, 例文に関しては校正作業を行っていないので個数の表記を省

略する。

4. 2. 5 研究の流れ

(1) 参加者の募集

東京都内の大学の授業で実験への協力を依頼した。参加協力依頼の用紙を配布した後, 事前説明として, “データは参加者番号をつけて扱い, 個人が特定されないようにした上で統計的に処理すること”, “参加受諾後でも, 自由意思に基づき受諾の撤回が可能であること”, “個人情報連絡手段としてのみ使用し, 厳重に管理・破棄すること” を説明した。その上で, 承諾を得られた参加者には名前とメールアドレス, 参加可能日時の記入を求めた。記入をしてくれた参加者は実験参加の意思があると見なし, のちほど記入してあるメールアドレス宛に詳細な参加依頼メールを送り, 日程調整後に実験を実施した。また, 大学生や大学院生の知人や, 知人の知人にも, 同様の手順を踏んだ上で, 実験への協力を依頼した。

(2) 実験実施手続き

参加者を実験室に案内し, 質問紙調査, パソコンを使った課題, 文章校正課題を行ってもらう旨, 所要時間等について説明した。また, 個人のデータは統計的に処理され, 決して個人が特定されるものではなく, 研究以外の目的では使用しないことを告げ, 同意書に署名を求めた。

まず, 制御焦点質問紙と社会的望ましさ質問紙への回答を求めた。続いて, 促進焦点GNAT, 予防焦点GNATを用いて各潜在的態度を測定した。始める前に, パソコンの画面と口頭でGNATの手続きを説明し, 不明な点は適宜補足をして理解を求めた。準備ができた後, 参加者のペースで課題に取り組んだ。なお, 課題間の順序効果を抑制するため, 参加者ごとにカウンターバランスを行い2つのGNATの実施順序を調整した。

参加者の集中力等の問題を考慮し, 2つのGNATが終了した後に約3分間の休憩を挟んだ後, 文章校正課題に移った。文章校正課題について, 「見本」と, 変形した「課題」の文章をそれぞれA4用紙に印刷したものを参加者に配布し, 2つ文章を較べて違っている

Table 7 使用した文章校正課題の変形箇所の種類別個数

	活字の種類	脱字	文字順序の入れ替え	形が似た文字	同音で異なる漢字	句読点の省略や入れ替え	計
練習課題	9	10	11	10	9	11	60
本課題	8	10	11	11	8	11	59

箇所をチェックし、終了時に読んでいた箇所に」を記入するよう教示した。まず例文を用い誤字・脱字の種類と校正の方法について説明し、練習課題を行った。練習課題終了の後、本課題を行った。練習課題、本課題共に制限時間は3分間に設定した。課題終了後、デブリーフィングを行い、謝礼を渡して実験を終了した。本実験に要した時間は30～40分であった。

4. 3 結果

4. 3. 1 分析対象データについて

制御焦点質問紙、社会的望ましき質問紙においてデータの欠損は見られなかったため、実験参加者92名を分析対象とした。促進焦点GNAT、予防焦点GNAT、文章校正課題の迅速さ（speed）の指標である“チェック数”，正確性（accuracy）の指標である“ミス率”の得点については、それぞれの平均値±2標準偏差を分析対象とした。その結果、促進焦点GNATは87名、予防焦点は82名、チェック数は89名、ミス率は88名が分析対象となった。

4. 3. 2 制御焦点尺度の得点化

制御焦点尺度のそれぞれの項目に関して当てはまる程度を、「まったくない」「あまりない」「たまにある」「時々ある」「よくある」の5件法で回答を求めた。回答結果は、「まったくない」を1点、「あまりない」を2点、「たまにある」を3点、「時々ある」を4点、「よくある」を5点として得点化した。なお、全11項目のうち、7項目は逆転項目であるため、「よくある」を1点、「時々ある」を2点、「たまにある」を3点、「あまりない」を4点、「まったくない」を5点として

得点化した。

11項目に関して、因子分析（最尤法，バリマックス回転）を行った。固有値の推移（2.37, 1.56, .78, .69, …）から、また因子の解釈のしやすさから考慮して2因子構造ととらえた。累積寄与率は、38.72%であった。因子分析の結果をTable 8に示した。

分析にあたっては、因子負荷量が絶対値.40以下の項目を削除し、各因子項目の中から因子負荷量が高い項目（予防焦点4項目、促進焦点3項目）を尺度項目として選択した。各尺度項目の得点を合計し、平均した値を尺度得点とした。

得られた各下位尺度の得点は、「顕在的促進焦点」と「顕在的予防焦点」と定義した。顕在的促進焦点は、値が高いほど促進焦点が高い傾向にあり、値が低いほど促進焦点が低い傾向にあることを示す。顕在的予防焦点は、値が高いほど予防焦点が高い傾向にあり、値が低いほど予防焦点が低い傾向にあることを示す。

なお、それぞれの平均値と標準偏差は、Table 9の通りである。

4. 3. 3 社会的望ましき尺度の得点化

社会的望ましき尺度の各下位尺度（自己欺瞞・印象操作）について、それぞれの項目に関して当てはまる程度を、「全くあてはまらない」「あてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」「非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。回答結果は、「全くあてはまらない」を1点、「あてはまらない」を2点、「ややあてはまらない」を3点、「どちらともいえない」を4点、「ややあてはまる」を5点、「あてはまる」を6点、

Table 8 制御焦点項目に関する因子分析の結果（最尤法，バリマックス回転）

No.	制御焦点尺度項目	因子1	因子2	共通性
顕在的予防焦点				
4.	子どもの頃、親の感情を逆なですることはよくあったか。	.723	.005	.522
6.	子どもの頃、親が好ましくないと思うような振る舞いをしたことがあるか。	.637	-.094	.414
2.	子どもの頃、親が決して許さないような「してはいけないこと」をすることはあったか。	.636	-.036	.414
5.	親が決めたきまりや親の言うことにはいつも従ってきたか。	.634	-.111	.406
顕在的促進焦点				
9.	自分にとって大切な事をやることに関して、自分の理想のようにはできていないと感じる。	.017	.617	.381
1.	たいていの人と比較して、あなたは人生において欲しいものが手に入らないことがよくある。	-.063	.598	.361
10.	人生において、私は成功に向かって前進してきたような気がする。	-.093	.451	.212
	因子寄与	1.75	.96	2.71
	累積寄与率	24.96%	38.72%	

Table 9 顕在的促進焦点および顕在的予防焦点の分布

	N	最小値	最大値	平均値	SD
顕在的促進焦点 ($\alpha = .75$)	92	1.333	5.000	3.040	.719
顕在的予防焦点 ($\alpha = .57$)	92	1.5	5.000	3.299	.823

「非常にあてはまる」を7点として得点化した。なお、全24項目のうち、11項目は逆転項目であるため、「非常にあてはまる」を1点、「あてはまる」を2点、「ややあてはまる」を3点、「どちらともいえない」を4点、「ややあてはまらない」を5点、「あてはまらない」を6点、「全くあてはまらない」を7点として得点化した。回答を求めた全24項目のうち、自己欺瞞に関するものは12項目、印象操作に関するものは12項目であり、それぞれの下位尺度の項目ごとに平均値を求めた。

得られた各下位尺度の得点は、「自己欺瞞」と「印象操作」と定義した。自己欺瞞は、値が高いほど自己欺瞞が高い傾向にあり、値が低いほど自己欺瞞が低い傾向にあることを示す。印象操作は、値が高いほど印象操作が高い傾向にあり、値が低いほど印象操作が低い傾向にあることを示す。

なお、それぞれの平均値と標準偏差は、Table 10の通りである。

4. 3. 4 GNATの得点化

(1) 得点化の方法

GNATから得られたデータを潜在的指標として得点化する方法として、大きく二つが挙げられる。一つは大月・松下・井出原・中本・田中・杉山 (2008) の代表される連合弁別課題の反応時間を指標として得点化する方法である。もうひとつは、川上・佐藤・富田 (2010, 実験3) などで使用されている、弁別課題における正答・誤答をヒット (hit: ターゲット刺激に正しく反応)、コレクトリジェクション (correct rejection: ディストラクター刺激を正しく回避)、フォルスアラーム (false alarm: ディストラクター刺激に誤って反応)、ミス (miss: ターゲット刺激を誤って回避) に分

類し、ヒット数とフォルスアラーム数を指標として得点化する方法である。

Wallace, Little, and Shull (2008) によれば、促進焦点はより多くの目標達成を求めて迅速に課題を遂行し、予防焦点は目標達成場面においてミスなく課題を遂行することを求めるとされている。この知見を制御焦点GNATの得点化の方法に当てはめると、促進焦点が高い人は、より迅速な課題遂行を目指し、連合弁別課題において、より速い反応速度を示すと考えられる。また予防焦点が高い人は、ミスなく課題を遂行することを目指し、連合弁別課題において、ヒット数が増え、フォルスアラーム数が減ると考えられる。

以上のことより、促進焦点GNATは大月他 (2008) に倣い反応時間を、予防焦点GNATは川上他 (2010) に倣いヒット数とフォルスアラーム数を指標として得点化することとした。

(2) 促進焦点GNATの得点化

促進焦点GNATについて、得られた課題の反応時間を、大月他 (2008) の得点化の手続きに倣って得点化を行った。データは、5, 6, 9ブロック目の「“得る-喜び”」との連合弁別課題および、7, 8, 10ブロック目の「“得る-落胆”」との連合弁別課題の反応時間を使用した。誤反応数が各ブロック内の総試行数の4分の1以上であるデータは除外対象とした。

まず、得られたすべての反応時間を対数変換したうえで、正反応のみにおいて、「“得る-喜び”」の連合弁別課題および「“得る-落胆”」の連合弁別課題の平均反応時間を算出した。その後、「“得る-落胆”」の連合弁別課題の平均反応時間から「“得る-喜び”」の連合弁別課題の平均反応時間を減算した値を求め、これを促進焦点GNATの得点とした。得点が正の方向に

Table 10 自己欺瞞および印象操作の分布

	N	最小値	最大値	平均値	SD
自己欺瞞 ($\alpha = .70$)	92	1.535	5.182	3.398	.736
印象操作 ($\alpha = .62$)	92	1.000	6.222	3.261	.856

大きいほど潜在的促進焦点の傾向が高いことを示している。各得点の幅は、 $-2 \sim +2$ をとる。

(3) 予防焦点GNATの得点化

データは、6, 9ブロック目の「失う-安心」との連合弁別課題および、8, 10ブロック目の「失う-不安」との連合弁別課題の正解・不正解の数を使用した。参加者ごとに二つ（「失う-安心」、「失う-不安」）の組み合わせブロックの本試行80試行を、それぞれの弁別の正解・不正解から、ヒット（ターゲット刺激に正しく反応）、コレクトリジェクション（ディストラクター刺激を正しく回避）、フォルスアラーム（ディストラクター刺激に誤って反応）、ミス（ターゲット刺激を誤って回避）に分類した。さらに、各ブロックにおけるヒットの割合と、フォルスアラームの割合をプロビット変換し、ヒットの値からフォルスアラームの値を引いた値を、連合強度を示す d' とした。以上の手続きの後、「損失-不安」の d' から「損失-安心」の d' の差をとり、この値を予防焦点GNATの得点とした。得点が正の方向に大きいほど潜在的予防焦点の傾向が高いことを示している。

得られた各GNATの得点は、「潜在的促進焦点」と「潜在的予防焦点」と定義した。促進焦点GNAT得点は、値が大きいほど「得る」—「喜び」の連合が強いことになり、潜在的促進焦点が高いことを表す。予防焦点GNAT得点は、値が大きいほど「失う」—「不安」の連合が強いことになり、潜在的予防焦点が高い

ことを表す。

なお、それぞれの平均値と標準偏差は、Table 11の通りである。

4. 3. 5 文章校正課題の得点化

文章校正課題の本課題試行について以下の得点を求め、記述統計量を算出した。

①チェック数：読み終わった部分の中でチェックされた変形箇所個数

②ミス率（%）：（見落とされた変形箇所個数÷通過数）×100

なお、それぞれの平均値と標準偏差は、Table 12の通りである。

4. 3. 6 顕在的制御焦点と潜在的制御焦点の関連

制御焦点質問紙を使って測定した顕在的な制御焦点理論と、GNATを使って測定した潜在的な制御焦点理論との相関分析を行った。

その結果、顕在的促進焦点と潜在的促進焦点の間と、顕在的予防焦点と潜在的予防焦点の間に有意な相関はなかった。顕在的予防焦点と潜在的促進焦点の間に弱い正の相関があった。

結果はTable 13に示す。

4. 3. 7 顕在的・潜在的制御焦点と社会的望ましさの関連

顕在的・潜在的促進焦点および顕在的・潜在的予防

Table 11 潜在的促進焦点および潜在的予防焦点の分布

	<i>N</i>	最小値	最大値	平均値	<i>SD</i>
潜在的促進焦点	87	-0.011	0.062	0.023	0.020
潜在的予防焦点	82	-0.490	0.960	0.227	0.343

Table 12 文章校正課題におけるチェック数とミス率の分布（本課題）

	<i>N</i>	最小値	最大値	平均値	<i>SD</i>
チェック数	89	15	41	27.719	6.263
ミス率	88	4.762	47.619	22.680	11.141

Table 13 顕在的制御焦点と潜在的制御焦点の相関係数

	顕在的 促進焦点	顕在的 予防焦点	潜在的 促進焦点	潜在的 予防焦点
顕在的促進焦点	—			
顕在的予防焦点	-109	—		
潜在的促進焦点	-083	.235*	—	
潜在的予防焦点	-090	-016	-151	—

* $p < .05$

焦点と、社会的望ましさの相関分析を行った。

相関分析の結果、顕在的促進焦点と自己欺瞞の間にある程度の正の相関があった ($r = .387, p < .01$)。また、顕在的促進焦点と印象操作の間に弱い正の相関があった ($r = .254, p < .05$)。

潜在的促進焦点、顕在的・潜在的予防焦点に関しては、社会的望ましさにおけるいずれの得点とも相関はなかった。

結果はTable 14に示す。

Table 14 顕在的・潜在的制御焦点と社会的望ましさの相関係数

	自己欺瞞	印象操作
顕在的促進焦点	.387**	.254*
顕在的予防焦点	-.025	.101
潜在的促進焦点	-.002	.158
潜在的予防焦点	-.201	-.068

* $p < .05$, ** $p < .01$

4. 3. 8 顕在的・潜在的制御焦点とSpeed (迅速さ) /accuracy (正確性) の関連

顕在的・潜在的促進焦点および顕在的・潜在的予防焦点と、文章校正課題におけるチェック数・ミス率との相関分析を行った。

相関分析の結果、潜在的促進焦点とチェック数の間に弱い正の相関が示された ($r = .223, p < .05$)。また、潜在的予防焦点とミス率の間に弱い負の相関があった ($r = -.231, p < .05$)。

顕在的促進焦点・予防焦点に関しては、文章校正課題におけるいずれの得点とも相関はなかった。

結果はTable 15に示す。

Table 15 顕在的・潜在的制御焦点と文章校正課題の相関係数

	チェック数	ミス率
顕在的促進焦点	.008	-.077
顕在的予防焦点	.100	.162
潜在的促進焦点	.223*	.027
潜在的予防焦点	-.165	-.231*

* $p < .05$

4. 3. 9 各尺度得点間の回帰分析

(1) 社会的望ましさと顕在的促進焦点

仮説と相関分析の結果をもとに、社会的望ましさにおける自己欺瞞と印象操作を独立変数、顕在的促進焦点を従属変数として、回帰分析を行った。その結果、自己欺瞞から顕在的促進焦点への標準偏回帰係数は $\beta = .387$ であり、決定係数は $R^2 = .140$ ($p < .01$) であった。

回帰分析の結果を図示したものをFigure 3に示す。

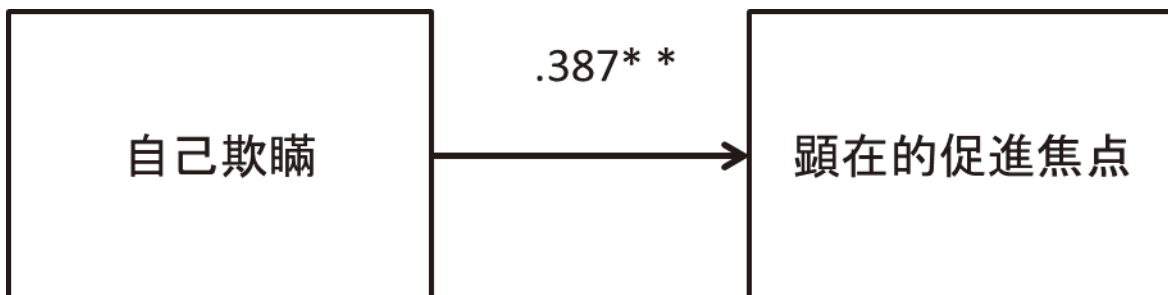
(2) 潜在的促進焦点と文章校正課題

仮説をもとに、潜在的促進焦点と潜在的予防焦点を独立変数、文章校正課題におけるチェック数とミス率を従属変数として、回帰分析を行った。その結果、潜在的促進焦点からチェック数に、潜在的予防焦点からミス率に有意な影響関係があった。潜在的促進焦点からチェック数への標準偏回帰係数は $\beta = .223$ であり、決定係数は $R^2 = .038$ ($p < .05$) であった。潜在的予防焦点からミス率への標準偏回帰係数は $\beta = -.231$ であり、決定係数は $R^2 = .041$ ($p < .05$) であった。

回帰分析の結果を図示したものをFigure 4に示す。

(3) 影響関係

以下、自己欺瞞と顕在的促進焦点および潜在的制御



** $p < .01$

Table 3 社会的望ましさと顕在的促進焦点の回帰分析

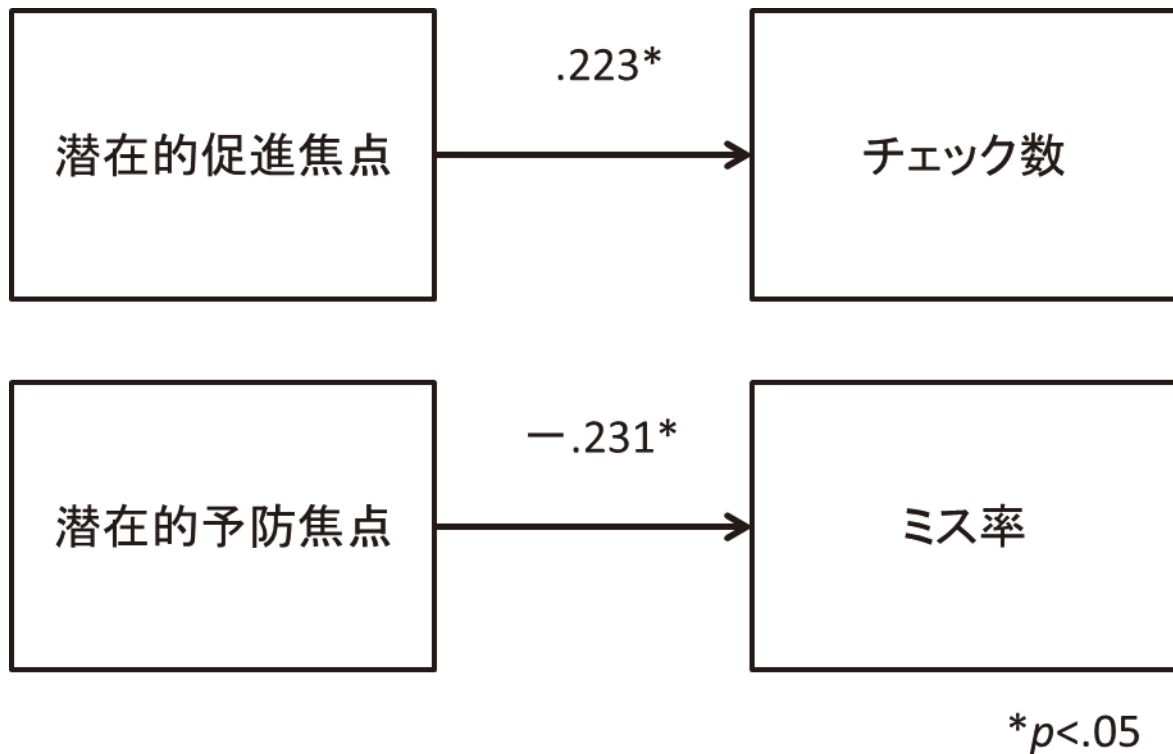


Figure 4 潜在的制御焦点と Speed (迅速さ) /accuracy (正確性) の回帰分析

焦点と、文章校正課題のチェック数・ミス率の関係を中心に、本研究の因果分析から明らかになったことについて記述する。

i 社会的望ましさから顕在的促進焦点への影響

社会的望ましさから、顕在的促進焦点 (.39) に有意な正のパス ($p < .01$) が得られた。したがって、社会的望ましさにおける自己欺瞞は、質問紙などで測定される顕在的な促進焦点に有意な正の影響を及ぼしているといえる。つまり、無意識に社会的に望ましく回答する“自己欺瞞”が高いと、顕在的な促進焦点の程度が高くなると言い換えることができる。

ii 潜在的制御焦点から文章校正課題への影響

潜在的促進焦点から、文章校正課題におけるチェック数 (.22) に正のパス ($p < .05$) が得られた。したがって、潜在的促進焦点の高さは、文章校正課題におけるチェック数に有意な正の影響を及ぼしていた。つまり、潜在的促進焦点が高いと、文章校正課題におけるチェック数が増えると言い換えることができる。

潜在的予防焦点から、文章校正課題におけるチェック数 (-.23) に負のパス ($p < .05$) が得られた。したがって、潜在的予防焦点の高さは、文章校正課題におけるミス率に有意な負の影響を及ぼしていることが示された。つまり、潜在的予防焦点が高いと、文章校正

課題におけるミス率が低くなると言い換えることができる。

5. 全体的考察

5. 1 全体的考察

5. 1. 1 Go / No-go Association Task を用いた制御焦点の測定

研究 I の結果、潜在的な制御焦点を測定するための、Go / No-go Association Task (GNAT) を作成した。これにより、潜在的な自己制御システムである潜在的促進焦点と潜在的予防焦点の測定が可能となった。

研究 II の結果より、質問紙による顕在的な制御焦点との相関係数は、促進焦点においては $r = -.083$ (n.s.), 予防焦点においては $r = -.016$ (n.s.) であり、顕在指標と潜在指標との関連は認められなかった。これにより仮説 4 は支持された。これは、測定される顕在指標が年齢、人種、自尊心など、プライベートに関わるものや、あからさまな態度表明が社会的に望ましくないものの場合、IAT 等の潜在指標との相関が低くなる (Greenwald et al., 2002) という知見に当てはまる結果である。また、顕在的な促進焦点に関して、社会的望ましさの下位尺度である“自己欺瞞”から正の影響を受けていることが確認された。これにより仮説 3 は一部支持された。無意識に社会的に望ましい回答をする

“自己欺瞞”の影響を受けることによって、質問紙などの顕在的な指標では促進焦点を適切に測定できていない可能性が示唆された。

以上のことより、質問紙による顕在的指標で測定できない制御焦点の潜在的な部分を、GNATでは測定できると考えられる。

5. 1. 2 潜在的促進焦点による迅速さ (speed) への影響

研究Ⅱの結果、潜在的促進焦点は、文章校正課題におけるチェック数を予測し、潜在的促進焦点が高いと、文章中から見つける変形箇所の数が増えることがわかった。ゆえに、仮説1の「潜在的促進焦点が高いと、文章校正課題における迅速さ (speed) の得点が高くなる」が支持された。また顕在的促進焦点は、文章校正課題におけるチェック数との関連を示さず、仮説5は支持された。

実験場面における文章校正課題において、本研究では作業方法のみを説明し、達成基準や望ましい到達度を実験参加者に教示することは行わなかった。これは、言語教示やフレーミング技法による促進焦点・予防焦点の状況的活性化を避け、特性的制御焦点から文章校正課題の得点を予測するという目的に符合するものである。また、作業方法のみを教示し、目的を教示しないことによって、実験参加者の文章校正課題中の行動統制は潜在的に行われていると捉える事ができる。

以上のことより、Posner and Snyder (1975) の二過程モデルから示唆されるように、潜在的な自己概念が統制困難な行動指標を予測するモデルは制御焦点理論における促進焦点においても示された。

潜在的な促進焦点が、文章校正課題におけるチェック数を予測したことにに関して、従来では促進焦点が高い人は肯定的結果をもたらす熱望方略 (eager strategy) を用いる傾向が高く、すばやく判断を下して大胆に行動する傾向を示すと言われてきた。本研究で測定した潜在的な促進焦点が高い人は、潜在的な熱望方略使用傾向が高いことを示しており、そのことが潜在的な行動統制における文章校正課題のチェック数 (迅速さ (speed)) に影響を及ぼしたと考えられる。

5. 1. 3 潜在的予防焦点による正確性 (accuracy) の予測

研究Ⅱの結果、潜在的予防焦点は、文章校正課題におけるミス率を予測し、潜在的予防焦点が高いと、文章中の変形箇所を見逃す割合が低くなることが示され

た。これにより、仮説2の「潜在的予防焦点が高いと、文章校正課題における正確性 (accuracy) の得点が高くなる」が支持された。また顕在的予防焦点は、文章校正課題におけるミス率との関連を示さず、仮説5は支持された。

上述のように、実験場面における文章校正課題中の行動統制は潜在的に行われていると捉える事ができる。また、顕在的な予防焦点と文章校正課題のミス率が関連を示さなかったことから、Posner and Snyder (1975) の二過程モデルのように、潜在的な自己概念が統制困難な行動指標を予測するモデルは、制御焦点理論における予防焦点においても示されたと考えられる。

潜在的な予防焦点が、文章校正課題におけるミス率を予測したことにに関して、従来では予防焦点が高い人は否定的結果をもたらすリスクを排除しようとする警戒方略 (vigilant strategy) を用いる傾向が高く、じっくりと状況を見極めて慎重な行動を取ろうとする傾向を示すと言われてきた。本研究で測定した潜在的な予防焦点が高い人は、潜在的な警戒方略使用傾向が高いことを示しており、そのことが潜在的な行動統制における文章校正課題のミス率 (正確性 (accuracy)) に影響を及ぼしたと考えられる。

5. 2 今後の課題と展望

本研究における課題と展望を、以下の2点に整理する。

第1に、GNATで使用した刺激語のばらつきの問題がある。本研究で作成したGNATで使用されている刺激語は、文字数にばらつきがあった。単語の視覚的認知に関わる視点から、文字列を構成している単位数によって、知覚のされやすさが異なると言われており、本研究でも、使用した刺激語の文字列のばらつきにより、反応時間に多少の誤差が出たことが考えられる。また、単語が通常どのように表記されることが多いかに関わる単語の“親近性”や、どれくらいよく知られている単語なのかに関わる単語の“熟知性”の程度によって、反応速度が異なることから、GNATで用いる刺激語をさらに精査し、潜在的な制御焦点を測定するための指標として、妥当性をさらに高めていくことが必要となるだろう。

第2に、顕在的な制御焦点として使用した指標の信頼性・妥当性の問題が挙げられる。本研究では遠藤 (2011) が作成した制御焦点尺度日本語版を使用した。遠藤 (2011) では、その信頼性・妥当性は証明されていたが、本研究においては遠藤が想定したような尺度

構成にはならず、促進焦点・予防焦点いずれにおいても内的一貫性も高くはなかった。また、顕在的予防焦点は潜在的促進焦点と弱い関連が見られ、顕在的な予防焦点の指標が、想定されるものを適切に測定できていたとは言い難い。このことは、日本において制御焦点理論研究が多くなされていないことに起因すると考えられるが、個人差を測定する指標の作成は重要な研究領域であり、潜在的な制御焦点の指標開発の有用性を説く上でも、その信頼性・妥当性の更なる検証が望まれる。また、本研究においては顕在的な制御焦点が予測する認知・行動変数を考慮にはいれなかった。今後は、顕在的な制御焦点指標の信頼性・妥当性を更に検証し、その指標が予測すると考えられる統制可能な認知・行動変数を用いることが望まれる。意識的な自己制御システムの検証を加えることによって、制御焦点理論研究のより広範な知見の蓄積が期待される。

6. 結論

本研究の目的は、潜在的な制御焦点を測定するための、促進焦点GNATと予防焦点GNATを作成すること。また、測定した潜在的な促進焦点、予防焦点が、文章校正課題における迅速さ (speed) と正確性 (accuracy) に及ぼす影響から基準関連妥当性を検証することであった。

本研究では、促進焦点GNATと予防焦点GNATを作成し、潜在的な促進焦点、予防焦点の測定に成功した。GNATで測定した潜在的な制御焦点は、質問紙で測定した顕在的制御焦点とは異なり、文章校正課題における迅速さ (speed) と正確性 (accuracy) に影響を及ぼすことが明らかになった。このことから、本研究で作成した促進焦点・予防焦点GNATの基準関連妥当性は認められた。

従来の制御焦点理論研究では、セルフディスクレパンシーを特性的制御焦点として扱う (e.g., Higgins et al., 1997; Shah et al., 1998) か、促進焦点・予防焦点を状況的に活性化させ (e.g., Stepper et al., 1997; Higgins et al., 1997; Friedman & Foster, 2001)、認知・行動変数への影響を検証してきた。しかし、制御焦点を特性的に捉えた指標からの影響は十分検証されていなかった。さらに、社会的望ましきバイアスの影響を受けず、従来では予測することの出来なかった統制困難な行動指標を予測することのできる潜在的な指標の作成例はほとんどない。ゆえに本研究は有意義なものだといえる。

今後は、作成したGNATを使用し、潜在的な制御焦

点が担う働きを考慮した上で、信頼性・妥当性に関するさらに詳細な知見の蓄積が期待される。

注

- 1 制御焦点理論と感情機能の関連を検証した研究結果より、快-不快の感情について制御焦点に応じて質的に異なる2つの次元性が見られることが明らかになっている。促進焦点の場合は喜び-落胆次元、予防焦点の場合は安心-不安次元として経験される。
- 2 1回目に行った課題の方が2回目に行う課題よりも反応時間が速くなるという課題内順序効果 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) を抑制するために行った。
- 3 Nosek and Banaji (2001) のデモスクリプトにならない、各ブロックの制限時間は、単弁別課題においては1000ms、通常の連合弁別課題では750ms、速度を上げた連合弁別課題では600msとした。

引用文献

- Asendorpf, J. B., Banse, R., & Mücke, D. (2002). Double dissociation between implicit and explicit personality self-concept: the case of shy behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 380-393.
- Brendl, C. M., Higgins, E. T., & Lemm, K. M. (1995). Sensitivity to varying gains and losses: The role of self-discrepancies and event framing. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 1028-1051.
- Carver, C.S., & Scheier, M. F. (1982). Control theory: A useful conceptual framework for personality-social, clinical, and health psychology. *Psychology Bulletin*, **92**, 111-135.
- Wallace, J. C., Little, L. M., & Shull, A. (2008). The moderating effects of task complexity on the relationship between regulatory foci and safety and production performance. *Journal of Occupational Health Psychology*, **13**, 95-104.
- 遠藤由美 (2011). 制御焦点尺度日本語版の検討 日本社会心理学会第52回大会発表論文集, **206**.
- Foster, J., Higgins, E. T., & Bianco, A. T. (2003). Speed/accuracy decisions in task performance: Built-in trade-off or separate strategic concerns? *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **90**, 148-164.
- Friedman, R.S., & Foster, J. (2001). The Effects of Promotion and Prevention Cues on Creativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 1001-1013.
- 藤井勉 (2010). 「暗黙の」知能観と社会的望ましきの関連—他の特性との関連も交えて— 学習院大学人文科学論

- 集, **19**, 151-162.
- 藤井勉・上淵寿 (2010). 潜在連合テストを用いた暗黙の知能観の査定と信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, **58**, 263-274.
- Gray, J. A. (1981). A critique of Eysenck's theory of personality. In H. J. Eysenck (Ed.), *A model for personality* (pp. 246-276). Berlin: Springer-Verlag.
- Gray, J. A. (1990). Brain systems that mediate both emotion and cognition. *Cognition and Emotion*, **4**, 269-288.
- Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. (2002). A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, **109**, 3-25.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and Using the Implicit Association Test: I. An Improved Scoring Algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, **30**, 1-46.
- Higgins, E. T., Friedman, R. S., Harlow, R. E., Idson, L. C., Ayduk, O. N., & Taylor, A. (2001). Achievement orientations from subjective histories of success: Promotion pride versus prevention pride. *European Journal of Social Psychology*, **31**(1), 3-23.
- Higgins, E. T., Shah, J., & Friedman, R. S. (1997). Emotional responses to goal Attainment: Strength of regulatory focus as moderator. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 515-525.
- Higgins, E. T., & Tykocinski, O. (1992). Self-discrepancies and biographical memory: Personality and cognition at the level of psychological situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 527-535.
- 池内了 (2006). テクノロジーとの付き合い方 新しい国語3 東京書籍. pp.103-106.
- 川上直秋・佐藤広英・吉田富二雄 (2010). 単純接触がカテゴリ評価に与える効果 - IATとGNATを用いて - 心理学研究, **81**, 437-445.
- 小久保栄一郎 (2012). 月の起源を探る 国語3. 光村図書 pp.42-48.
- Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: Regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, **83**, 854-864.
- Midgley, C., Kaplan, A., Middleton, M., Maehr, M. L., Urdan, T., Anderman, L. H., Anderman, E., & Roeser, R. (1998). The development and validation of scales assessing students' achievement goal orientations. *Contemporary Educational Psychology*, **23**, 113-131.
- Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2001). The Go/No-go Association Task. *Social Cognition*, **19**, 625-664.
- 大月友・松下正輝・井出原千恵・中本敦子・田中秀樹・杉山雅彦 (2008). 社会不安における潜在的連合に関する研究 行動療法研究, **34**(2), 89-100.
- 尾崎由佳 (2011). 制御焦点と感情 - 促進焦点と予防焦点にかかわる感情の適応的機能 - 感情心理学研究, **18**(2), 125-134.
- Paulhus, D. L. (1984). Two-component models of socially desirable responding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 598-609.
- Posner, M. I., & Snyder, C. R. (1975). Attention and cognitive control. In R. L. Solso (Ed.), *Information processing and cognition* (pp. 55-85). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Roney, C., Higgins, E. T., & Shah, J. (1995). Goals and framing: How outcome focus influences motivation and emotion. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1151-1160.
- Shah, J., Higgins, E. T., & Friedman, R. S. (1998). Performance Incentives and Means: How Regulatory Focus Influences Goal Attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 285-293.
- Stepper, S., Strack, F., & Higgins, E. T. (1997). *The memory system: A self-regulatory perspective*. Unpublished manuscript, Würzburg University.
- Tan, J. A., & Hall, R. J. (2005). The effects of social desirability bias on applied measures of goal orientation. *Personality and Individual Differences*, **38**, 1891-1902.
- 谷伊織 (2008). バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIRD-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **17**, 18-28.
- 内橋克人 (2012). 顔の見える国際協力 学校図書 中学国語3 pp.314-320.
- 山田尚子 (1999). 失敗傾向質問紙の検討: 文章校正課題におけるエラーとの関連 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 248.
- VandeWalle, D. (1997). Development and validation of a work domain goal orientation instrument. *Educational and Psychological Measurement*, **57**, 995-1015.

潜在的な自己制御システムを測定する Go/No-go Association Task の作成

The Development of Go/No-Go Association Tasks of Measuring Implicit Self-Regulation Systems

坂井 亮 紀^{*1}・上 淵 寿^{*2}

Akinori SAKAI and Hisashi UEBUCHI

学校心理学分野

Abstract

The regulatory focus theory (Higgins, 1997) treated pleasure and pain as inter-independent regulatory systems, and distinguished qualitative differences between pleasure situations and pain situations. One self-regulation system as called “promotion focus” approached gain and avoided non-gain. Other self-regulation system as called “prevention focus” was approached non-loss and avoided loss. Regulatory focuses appeared to effect human’s emotions, thinking, behaviors. (Higgins, 1998). However, from the point of view on characters, effects of regulatory focuses were not verified sufficiently. Especially, it is important to making implicit measures of regulatory focuses to predict uncontrollable behaviors without social desirability bias. So, this study, by using go/no-go association task, tried to develop the scales measuring implicit self-regulation systems. Then, these scales predicted automatic actions.

Keywords: regulatory focus theory, self-regulation, implicit cognition, Go/No-go Association Task

Department of School Psychology, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨: 制御焦点理論 (Higgins, 1997) は、快と不快を独立した制御システムとして扱い、快・不快状態の各々の質的差異を区別した。利得の存在に接近し、利得の不在を回避しようとする自己制御システムは「促進焦点」、損失の不在に接近し、損失の存在を回避しようとする自己制御システムは「予防焦点」と名付けられている。制御焦点は、人の感情・思考・行動に影響をあたえることが明らかになっている (Higgins, 1998) ものの、特性的観点からの制御焦点の影響は、十分検証されていなかった。特に社会的望ましきバイアスの影響を受けず、統制困難な行動指標を予測することのできる潜在的な指標の作成は、とても意義がある。ゆえに、本研究では、Go/No-go association task を利用して、潜在的な自己制御システムを測定する尺度の開発を試みた。そして、この尺度が自動的な行為を予測することが示された。

キーワード: 制御焦点理論, 自己制御, 潜在的認知, Go/No-go Association Task

*1 Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University

*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)